

「身体」をキーワードにした教科横断的学習の可能性

土 田 了 輔*・森 田 啓**・上 島 慶***

(平成30年2月28日受付；平成30年4月20日受理)

要 旨

この研究は、クロスカリキュラムを実現している大学教育の視点から、横断的な学習を検討したものである。我が国の教科横断的学習は、平成12年に小・中・高等学校において「総合的な学習の時間」が創設されたのを機会に取り組みが発展した。生活の中にある現代的課題を学校で扱うには、教科の枠を超えた学習が望ましいとの考えが基盤にあるとされている。このような学習は、一人の学級担任が複数教科にある共通のテーマを拾い出し、授業を構成するという点では、小学校において実施しやすい環境にあるが、教科担任制を採用している中学校や高等学校では、複数教科の教員による協力が必要となるため、多くの課題が残されていると考えられる。

しかしながら、我が国の大学で、クロスカリキュラムを実現している事例がある。普通、大学は、専門が細分化されているので、カリキュラムマネジメントがやりにくい環境にあるはずである。したがって、大学におけるクロスカリキュラムを実現させている要因が明らかになれば、今後の教科横断的学習を考える上で有益である。

考察の結果、「身体」やそれに関連する「スポーツ」「健康」といった用語をキーワードにすることで、様々な専門領域を横断する学習を編成できる可能性があることがわかった。

KEY WORDS

横断的学習 Cross-curricular learning, 身体 Body, 健康 Health, スポーツ Sport

1 はじめに

国立教育政策研究所（2015）が示した『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～』では、「知識の質の向上と資質・能力の育成、あるいは、教科等の学びと教科横断的・総合的な学びをどのように結び付けていくかが、教育目標・内容・方法・評価に関する大きな課題」⁽¹⁾とされている。何を知っているかではなく、何ができるようになったかを問う新しい形の知は、教科という縦割りにとどまっていた学校において授けられる知を、統合しながら生活に結びつけていく生きた知として機能することが期待される。かつてデューイが「学校を生活に関連づければよいのである」⁽²⁾として、教科横断的・総合的な学びを、学校を変えることにより実現しようとしたが、日本の学校は、総合という学習を立ち上げて、教科横断的な学びの促進を図ってきた。したがって教科横断的な学びの重要性は、この度の国立教育政策研究所の報告書を待たずして既に語られており、たとえば、「クロスカリキュラム」⁽³⁾とか、「カリキュラムマネジメント」⁽⁴⁾などの関連用語がある。上越市では市をあげて「視覚的カリキュラム」⁽⁵⁾を導入し、小中学校におけるカリキュラムマネジメントの導入をサポートしている。ところが、このような試みは主に小中学校を中心としてなされており、高等学校、大学においては、教科や専門の壁が依然として厚く、高等教育において教科横断的な学びを実現することは困難ように見える。また、そもそも小学校では生活科や総合的な学習が教科と連動して計画しやすいので、「生活科や総合的な学習の時間を中核としたカリキュラムマネジメント」⁽⁶⁾が形式的にも組まれやすいのだが、そのような「統合」を念頭にいたカリキュラム設定が苦手なはずの大学で、カリキュラムマネジメントと呼びうる事例が散見された。したがって、このような大学でのカリキュラムマネジメントの事例を分析することで、カリキュラムマネジメントの新しい考え方が生まれることが期待される。そこで、本研究は、大学体育関連講義において横断的なカリキュラムの構築を実現させている事例からキーワードを抽出し、そのキーワードに基づき、小中学校の各教科の学習指導要領解説の内容を読み解くことで、横断的な学びの可能性を探ることを目的とする。

*芸術・体育教育学系

**千葉工業大学

***新潟工科大学

2 新潟工科大学における教育改革プロジェクトの事例

新潟工科大学は、新潟県柏崎市に位置する工科系の4年制私立大学である。学部は工学部のみ単科大学であり、在籍学生数は平成29年度現在549名である。大学院は工学研究科に修士課程と博士課程がある。学部における体育関連の授業は、「体育実技A、B」であり、学部1年次にP2の選択必修科目と講義の「健康科学A、B」L1がある。体育実技の履修者は、142名で、学部1年生の90%以上が受講している。また、健康科学の履修者は109名で、学部2、3年生を合わせておよそ65%が健康科学を受講している。

同大では、健康教育を通じて健康に関する意識の向上を図っているものの、「学生は、自分自身の健康について関心を持ってはいるが、自身の健康状態についてそれほどよいとは思ってないと回答している」⁽⁷⁾と同様に、意識と行動の不一致が見受けられるという。このような現状から、健康教育の充実を目指し、A助教らによる「リストバンド型活動量計を活用した健康教育の実践と大学構内を利用した身体活動・運動マップの作成」が、平成30年度教育改革プロジェクトに採択された。このプロジェクトは、まだ採択が決まった段階であり、実施は次年度であるが、プロジェクトとして4名の学内教員が関わっており、代表者の1名を除く3名の教員は、体育関連科目の専門ではない。

表1 プロジェクトの構成員と所属・分担

区分	ID	学科名・所属部署名等	分担内容
代表者	A助教	基礎教育・教養系	身体活動量の測定・評価
構成員	B准教授	建築・都市環境学系	身体活動・運動マップの作成
構成員	C助教	建築・都市環境学系	身体活動・運動マップの作成
構成員	D准教授	知能機械・情報通信学系	身体活動量の測定・評価

プロジェクトの構成員は、代表者のA助教（基礎教育・教養系）、B准教授（建築・都市環境学系）、C助教（建築・都市環境学系）、そしてD准教授（知能機械・情報通信学系）である。A助教は学内で学部の体育関連科目を担当している。A助教、D准教授のプロジェクト内の担当は、「身体活動量の測定・評価」であり、B准教授、C助教のプロジェクト内の担当は「身体活動・運動マップの作成」である。この担当は、B准教授、C助教の専門がそれぞれ建築計画や都市・地域デザイン、まちづくりであること、ならびにD准教授の専門が生体工学や情報通信工学であることから実現した（表1）。

プロジェクトの参加学生は、工学科4年（建築・都市環境学系）14名が「身体活動・運動マップの検討」で参加し、被験者として該当講義を履修する工学部1、3年の60名が選ばれた。

2. 1 プロジェクトの概要

このプロジェクトは、比較的容易に身体活動・運動量を定量評価できるリストバンド型活動量計を用いて、学生の健康教育を実践することを目的としている。プロジェクトは体育関連講義「健康科学A・B」と建築コースに所属する構成員の演習・ゼミを利用して実施するクロスカリキュラムである。平成30年度6月から2月に実施予定である（図1）。

取り組みの内容は、被検者となる学生にリストバンド型活動量計（GARMIN社製vivosport slate）を装着させ、学生生活における身体活動・運動量を計測する。新潟工科大学は入学時に学生へiPadを貸与していることから、学生に生活内で身体活動・運動量をフィードバックし、習慣的に管理を行う予定となっている。建築・都市環境学系の学生は、身体活動・運動量の評価を把握した上で、大学構内を利用した身体活動・運動マップを検討することになる。実際の身体活動は、ジョギングとし、検討したマップは屋外を想定して作成させる予定である（6月～7月）。

次に、7月中に「健康科学B」の講義で予定している「有酸素運動の実践」において、建築・都市環境学系の学生が検討したコースでジョギングを指導する。受講生は活動量計を装着し、運動量と強度からジョギングおよびコースの定量評価を実施することとなる。後期は気象条件を考慮して屋内施設を利用したウォーキングを行い、同様の定量評価を行う計画となっている。

このプロジェクトで期待される効果としては、健康の知識はあっても実践できない学生が、自身の身体活動・運動量を即時的にフィードバックすることにより、健康を維持増進するために必要な身体活動・運動を実施するための実践力を身に付けることである。また、新潟は年の後半に気象条件の悪化があり、屋外での活動が不足しがちである。

項目	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
大学生の日常生活における身体活動・運動量の調査	測定									
測定および身体活動・運動マップ（屋外）の検討	屋外マップ 検討									
健康教育の実践的指導・身体活動・運動マップ（屋外）の評価		実践 指導								
大学生の日常生活における身体活動・運動量の調査					測定					
測定および身体活動・運動マップ（屋内）の検討						屋内マップ 検討				
健康教育の実践的指導・身体活動・運動マップ（屋内）の評価						実践 指導				
身体活動・運動量の定量評価と健康教育実践のまとめ								まとめ		
身体活動・運動マップの作成								身体活動・ 運動マップ の作成		

図1 新潟工科大学のプロジェクト実施スケジュール

この点を考慮し、学生が、屋内でも手軽に身体活動・運動の習慣化を図ることが考えられる。そして、このような取り組みで作成された身体活動・運動マップは、大学に勤務する教職員にも利用可能のものとなることで、教職員の運動機会増加も期待されている。

3 A大学における体育関連科目を中核としたカリキュラムマネジメントの事例

A大学は、現在、工学部、創造工学部、先進工学部、情報科学部、社会システム科学部の5つの学部と工学研究科、情報科学研究科、社会システム科学研究科の3つの大学院研究科にそれぞれ修士課程、博士後期課程を持つ、関東圏の工業系の私立4年制大学である。在籍学生数は、平成29年5月現在、学部9,267名、大学院修士課程494名、博士課程後期50名である。

A大学の体育を中核としたカリキュラムマネジメントは、大学における教養体育の在り方の問い直しからはじめている。我が国における大学の教養体育は、新制大学制度発足後、戦後の混乱期における学生の体力、健康維持（主に結核予防）のため、保健体育4単位を必修として科目名と単位数が法律で規定された経緯がある。しかしながら、大学の体育がアカデミズムになじまないなどの理由で、日本学術会議、中央教育審議会、日本私立大学協会が、大学体育が必修科目であることに反対するなど、大学体育受難の時代になっている。

そのような中で、A大学では、教養教育の中で「体育を拡大する試み」を模索し、スポーツサイエンス分野にとどまらず、総合学際・発展分野の科目を企画・担当しながら大学の教養教育そのものの発展を視野に入れた、規模の大きなカリキュラムマネジメントを実現している。

表2 A大学の授業「総合学際科目（身体論）」の担当者の専門とテーマ

担当者の専門	講義テーマ
英語（英文学）	メディアとしての身体
英語（英文学）	メタファーとしての身体
英語（ヨーロッパ文学）	インセスト・タブーの謎と女性の交換
英語（ヨーロッパ美術史）	エイリアン映画における身体の表象
英語（ヨーロッパ美術史）	ゾンビ映画における身体の表象
英語（英文学）	小説を通じて考察する身体
英語（ヨーロッパ美術史）	映画の中の暴力と身体
英語（英文学）	建築の身体の解剖学
言語文化（ドイツ文学）	管理される身体
言語文化（ドイツ文学）	身体の断片化と再統合
社会（教育工学，認知科学）	メディア・コミュニケーションと脱身体化
社会（教育工学，認知科学）	ネット・コミュニケーションのなかの身体
物理（素粒子・原子核）	身体を構成する元素の起源
物理（素粒子・原子核）	放射性元素で探る身体
化学（分析化学・環境科学）	物質としての身体
化学（分析化学・環境科学）	心の入れ物としての身体
体育（スポーツ生理学）	スポーツ競技における身体と用具
体育（スポーツ生理学・栄養学）	身体と生活環境
体育（スポーツ生理学・栄養学）	身体と社会経済
体育（スポーツ哲学）	身体と所有
体育（スポーツ哲学）	ドーピングと身体
体育（スポーツ哲学）	新自由主義と身体

表3 A大学の授業「スノースポーツ」の担当者の専門とテーマ

担当者の専門	講義テーマ
化学（分析化学）	スキーやボードの素材・断熱材，ワックス
物理（原子核）	スノースポーツの力学
物理（物理化学）	スノースポーツの物理化学
物理（原子核）	摩擦・空気抵抗について
哲学（論理学）	スノースポーツの美学
数学	紫外線とスノースポーツ
社会学（教育工学）	ウィンタースポーツと流行・消費・広告
法学	スノースポーツ事故と法律
機械工学（振動工学）	スノースポーツと運動解析について

表2は、A大学の授業「総合学際科目（身体論）」の担当者の専門と講義のテーマの一覧である。この科目は、「身体」という共通のテーマについて、様々な専門的立場からテーマを設定し、講義を行っている。工業系の大学ながら、教養科目を担当する教員の学際性をバランスよく位置付けて、いわゆる理系、工業系に偏重せずに、多角的に共通テーマである「身体」に迫っている。この科目のコンセプトは、各分野を横断するような視点や角度から現代的・学術的なテーマを設定し、科学について総合的な理解を深めることが目標とされている。表3は、A大学の授業「スノースポーツ」の担当者の専門と講義のテーマの一覧である。

4 学習指導要領に見る「身体」に関連する内容

これまで見てきたように、大学のクロスカリキュラムを実現する上で「身体」「スポーツ」に関連するキーワードの可能性が見えてきた。このことから、中学校学習指導要領解説に「身体」「スポーツ」に関連する内容を探してみた（表4）。

たとえば、「体」をキーワードにすると、小学校理科の第4学年で「人の体のつくりと運動」、第6学年で、「人の体のつくりと働き」がある。中学校の理科では、「生物の体のつくりと働き」が一つのテーマになっており、生物の体のつくりと働きについて、観察や実験を通して理解することが求められている⁽⁸⁾。ちなみに、これらは理科では「生命」というキーワードで括られている。

一方、技術・家庭では、新しいエネルギー変換の技術を利用して作り出された製品と身体的な労働や作業の軽減⁽⁹⁾、幼児の身体を用いた遊びなど⁽¹⁰⁾、高齢者の身体の特徴⁽¹¹⁾、中学生に必要な栄養の特徴について、身体の成長と栄養素⁽¹²⁾について取り上げることが可能である。これについては、学習指導要領解説に「この学習では、理科〔第2分野〕「生物の体のつくりと働き」や保健体育科〔保健分野〕「健康な生活と疾病の予防」の学習などとの関連を図るよう配慮する」と記述されている。また、衣服については、身体部位の寸法と計測の仕方を理解できるようにする⁽¹³⁾。特別の教科道徳では、「最も基本的な自由である身体自由にしても、身体を維持するための衣食住にしても、それらを所有することを社会が承認していることによって支えられている。無法状態になれば、自由は保障されない。自分の欲望のままに生活することを制限するものとして法を捉え、仕方なく法に従うのは、進んで守るということではない」⁽¹⁴⁾、などとして身体を扱っている。

また、「スポーツ」というキーワードについては、外国語において「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする」があげられる。この目標における「関心のある事柄」とは、例えば、「スポーツ、音楽、映画、テレビ番組、学校行事、休日の計画、日常の出来事など、身の回りのことで生徒が共通して関心をもっていること」⁽¹⁵⁾などである。

一方、直接、キーワードで関連を調べると表4のようになるが、内容面から見ていくと、関連する部分はまだまだ多く見つかる。たとえば、Tsuchida and Isano (2016) はボールゲームにおけるボールの攻撃性に関する原理を速度で説明しているが⁽¹⁶⁾、速度については、中学校第3学年の「運動の規則性」⁽¹⁷⁾や、小学校第6学年の「速さ」⁽¹⁸⁾なども関連する。さらに、国語で扱われるテーマ「話すこと・聞くこと」については、体育の「ゲーム」、「ボール運動」における作戦会議等についての話し合い活動で生かされる内容である⁽¹⁹⁾。

表4 中学校学習指導要領解説に見られる「身体」や「スポーツ」の関連箇所

教科	キーワード	関連箇所	掲載ページ
理科	身体	「生物の体のつくりと働き」	82
技術・家庭	身体	「エネルギー変換の技術」	45
	身体	「家族・家庭生活」	72
	身体	「家族・家庭生活」	74
	身体	「衣食住の生活」	83, 94
特別の教科 道徳	身体	「主として集団や社会との関わりに関すること」	43
外国語	スポーツ	「話すこと〔発表〕」	23

5 考察

専門領域や教科の横断的な学習を構築する上で重要な視点に、テーマの設定がある。たとえば、小中高の学校現場では、「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成する営み」⁽²⁰⁾である。この場合、学校の教育目標たるグランドデザインが設定されているため、小中高ではカリキュラムマネジメントがやりやすい環境にあるようにみえる。加えて、小学校では学級担任がほとんどの授業を担当することから、カリキュラム全体を見渡して教育活動を展開するには適している。

しかしながら、大学という教育研究組織にあっては、各大学でディプロマポリシー、カリキュラムポリシーが制定されているとはいえ、各教員が持つ専門性の縦割りが影響し、そもそもクロスカリキュラムが実現しにくいことも予想された。我が国の大学体育の理念については、そもそも「健康」というキーワードが最も多いことは報告されてい

るが⁽²¹⁾、そのことをもってして、体育専門教員以外の教員の協力が得られるとは必ずしも言えない。

新潟工科大学のプロジェクトの事例を見ると、共通のテーマとして掲げられているのは「健康」であり、この点については鍋倉ら（2012）の先行研究と一致するが、プロジェクトで期待されているのは、授業内における健康維持ではなく、健康を維持・増進するに必要な実践力の習慣化である。これは、一種の「セルフマネジメント」の促進と考えられるが、セルフマネジメントまでを理念に掲げている大学は、2012年段階では少ないことが報告されている⁽²²⁾。このプロジェクトでは、身近な構内環境を見直し、手軽に実践できたり、冬期の天候悪化という地理的条件を、屋内施設を見直すことで克服し、実践への道筋をつけたりしている点で特色がある。つまり、共通のテーマとしては、「健康」という、大学のポリシーを超越した普遍的なものを設定しつつ、実践化を目指す部分で、「身体」という、より基盤にあるテーマが浮上する。森田ら（2016）は、「どの大学にも多様な学部・学科があるが、『身体』と無関係な学部・学科はないといってよい」⁽²³⁾と述べているように、人間の「身体」を扱う領域は多い。新潟工科大学も、仕事や運動の度合いという定量化困難なテーマを、医療やヘルスケアのための生体情報計測機器等を専門とするD准教授が分担し、大学構内を活用した身体活動・運動マップの作成には、施設や暮らしのデザイン等を専門とするB准教授、建築・都市の空間と活用のデザインを専門とするC助教、そして健康関連の講義と体育実技の授業を担当するA助教が協働し、このプロジェクトを企画している。

A大学の事例については、「身体」というキーワードに基づき、様々な専門領域の横断を実現させているが、それに加え、従来、体育の専門教員のみで実施しがちであった体育実技関連の科目に、他領域の教員を巻き込むことで、授業内容の高度化と充実を図っている。たとえば、従来のスキー実習に他領域の教員を引き込むことによって、「実習についてはスキー場で行うが、講義を受けてからスキー場に行くと、これまでとは違った視点から物事を把握することができる。たとえばスキー場に設置されているコース案内や危険を知らせる案内の位置について、スキー場には思いのほかゴミが多いこと、夏の間のスキー場の有効利用についてなど、さまざまな視点から考える機会が提供できる」⁽²⁴⁾といった具合に、まさに生活の中にあるスポーツ文化やその周辺を総合的に学ばせることに成功し「単一課題であっても多彩な視点からのアプローチが学習効率の向上へ有効である可能性」⁽²⁵⁾が指摘されている。田村（2017）もアクティブ・ラーニングの重要性についての文脈で『『深い学び』の実現のためには、身に付けた知識や技能を発揮したり、活用したりして関連付けることが大切』⁽²⁶⁾と述べており、先の森田ら（2007）の実践を裏付けている。加えて、A大学では、いわゆる、従来の体育の枠組みを、戦略的に破壊していることも特徴的である。このことにより、体育専門の教員が、逆に工業系の大学の専門領域に分け入り、卒業論文や修士論文の指導を受け持つという逆転現象も起きている。カリキュラムをクロスさせることで、学習の場と人的リソースもクロスしながら、学習者の学びを豊かにしているカリキュラムマネジメントの成功例と言えるであろう。先の新潟工科大学のプロジェクトも、建築・都市環境学系の教員のみならず、同学系の学生を参入させ、自身の身体活動・運動量を評価した上で、身体活動・運動マップを検討するよう設定されている。ここでも、学習の場と人的リソースをクロスさせながら、学習者の学びを豊かにすることが計画されている。

A大学の体育専任教授に、今回のクロスカリキュラムの実現要因を聞いたところ、大学のいわゆる教養系教員が、自身の専門を授業内容に生かしたいというマインドがあり、それが活かされた形となっている点を指摘していた。特に、近年の大学における教養教育が、高校までのリメディアル教育化していることがあり、このことで、教養系の大学教員が、自身の専門の活路を、身体やそれに関連するスポーツというキーワードに見出したことが、クロスカリキュラムの実現要因として述べられていた。このことを裏付けるように、英文学、欧文学、ドイツ文学の専門家が、その後自分たちで総合学際科目（カルチュラルスタディーズ）を開講したという。したがって、自身の専門が活かされるキーワードがあれば、ディプロマポリシー等とは別に、大学におけるカリキュラムマネジメントは飛躍的に進む可能性もある。この点は新潟工科大学の事例も類似しており、学校のグランドデザインや学習指導要領に内容的な制約を受ける小中高の現場より、共通のキーワードや場を探す自由度は、大学のほうが高い可能性もある。

新潟工科大学についても、プロジェクトに参加する教員に、このようなクロスカリキュラムのプロジェクトが企画できた要因について尋ねたところ、比較的小規模の大学であるという、大学の規模が一つの要因として挙げられた。大学の建物が集約されていること、教員同士がコミュニケーションを取りやすいこと、大学上層部との距離が近いという点が通じやすいことが重要であったことが述べられた。また、自身も専門がプロジェクトに生きたキーワードとして挙げられていたのは「健康」であり、それに関連した「身体」であることもわかった。もう一点、興味深い感想の一つに、各教員が、特に体育教育を意識したというよりは、自身の専門が、プロジェクトへの参入によって発展するという見通しを持っていることである。このことから、A大学同様に、今後、このようなプロジェクトが新潟工科大学の専門教育のカリキュラム等の充実に貢献していく可能性もある。

一方で、小学校、中学校の学習指導要領解説において、「身体」「スポーツ」をキーワードに関連箇所を検索する

と、理科、技術・家庭、道德、外国語などが挙げられた。特に「身体」に関しては、体育とのクロスというより保健領域とのクロスも考えられる内容もあったが、外国語にあったように、今日の社会では、「スポーツ」が身近にある文化の一つとして挙げられていることから、スポーツと言語、スポーツと用具、スポーツと倫理など、A大学の例にあったように、様々な観点からスポーツに関連したテーマを設定することも可能であろう。また、ボール運動、球技での話し合い活動を例にとると、専門用語をあえて使用しないことなどで成果を挙げている取り組みや⁽²⁷⁾、ある種目を別の種目の専門用語で説明させることで、深い理解につなげている取り組みもある⁽²⁸⁾。国語のテーマの一つである「話すこと・聞くこと」は、「深い学び」を希求する上で⁽²⁹⁾、今後よりいっそう体育に取り入れるなどの横断的取り組みが必要になるであろう。

6 終わりに

PISAの学力テストで一躍有名になったフィンランドの教育は、国家カリキュラム大綱の中で、「教科の教育内容だけでなく、教科横断的なテーマが指定されることになった」⁽³⁰⁾。その中で、子どもたちは、知識を探求し「それを社会における活動で適用する場合に、変更し、新たな知識を創造していくものである」⁽³¹⁾とされている。フィンランドでは「社会構成主義的な学習概念 (socio-constructivist learning conception)」⁽³²⁾を導入したことも、PISAでの成功として語られている。知識を探求し、様々な角度から吟味して変更、構築していくことが、深い学びに繋がっていくということであろう。

そのような新しいタイプの横断的な学習に、「身体」「スポーツ」「健康」というキーワードで共通の場を構築していくことで、カリキュラムをクロスさせるのみならず、教師の側も教科や専門の壁を打ち壊し、より豊かなカリキュラムマネジメントを実現させていく可能性を、大学における2つの実例が示していると考えられる。

謝 辞

本稿執筆にあたり、すばらしいカリキュラム内容をご教示くださったA大学、ならびに、新潟工科大学の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- (1) 国立教育政策研究所 (2015) 資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～, p.v.
- (2) デューイ著, 市村尚久訳 (1998) 学校と社会・子どもとカリキュラム, 講談社, p.153.
- (3) 今谷順重 (1997) 横断的・総合的な学習とクロスカリキュラムー新しい問題解決学習のストラテジーー, 黎明書房, pp.92-97.
- (4) 田村知子 (2014) カリキュラムマネジメントー学力向上へのアクションプラン, 日本標準ブックレットNo.13, 日本標準, p.12.
- (5) 石黒和仁 (2017) 特色ある学校づくりを推進する上越カリキュラム開発, 初等教育資料, No.958, pp.38-43.
- (6) 田村学 (2017) カリキュラム・マネジメント入門, 東洋館, p.54.
- (7) 小泉昌幸, 上島慶 (2017) 大学生の健康意識と行動に関する一考察, 新潟工科大学研究紀要, 21, p.113.
- (8) 文部科学省 (2017¹) 中学校学習指導要領解説 理科編, p.82.
- (9) 文部科学省 (2017²) 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編, p.82.
- (10) 上掲, p.45.
- (11) 文部科学省 (2017³) 前掲, p.72.
- (12) 文部科学省 (2017⁴) 前掲, p.83.
- (13) 文部科学省 (2017⁵) 前掲, p.94.
- (14) 文部科学省 (2017⁶) 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德, p.43.
- (15) 文部科学省 (2017⁷) 中学校学習指導要領解説 外国語, p.22.
- (16) Tsuchida, R., and Isano, R. (2016) Teaching games by using the principle of aggressive ball movements: A developmental study of learning through teaching games, 2015 Game Sense for Teaching and Coaching Conference Proceedings, University of Canterbury College of Education, Health and Human Development, Christchurch, NZ, pp.178-186.

- (17) 文部科学省 (2017¹⁾) 前掲, p.16.
- (18) 文部科学省 (2017²) 小学校学習指導要領解説 算数編, p.199.
- (19) 文部科学省 (2017³) 小学校学習指導要領解説 算数編, p.16.
- (20) 田村 (2014), 前掲書, p.12.
- (21) 銀倉賢治, 遠藤卓郎, 大高敏弘, 進藤正雄, 嵯峨寿, 松元剛, 谷川聡, 福田崇, 吉岡利貢, 武田丈太郎, 村瀬陽介, 山田永子, 宮下憲 (2012) 我が国の「大学体育」の基本理念とカリキュラム, 大学体育研究, 34, p.62.
- (22) 鍋倉ら (2012), 同上.
- (23) 森田啓, 引原有輝, 若林斉, 金田晃一, 西林賢武 (2016) 学士課程教育における大学体育 その可能性と再定義, 体育学研究, 61(1), p.224.
- (24) 森田ら (2016), 前掲論文, p.222.
- (25) 森田啓, 林容市, 谷合哲行 (2007) スノーボードを用いた教養教育, 大学教育学会誌, 29(2), pp.145-150.
- (26) 福田誠治 (2005) 競争しなくても世界一 フィンランドの教育, 国民教育文化総合研究所, p.21.
- (27) 土田了輔, 阿部敏也, 榊原潔, 與那嶺響, 北澤太野 (2013) 分業に基づくバスケットボールの単元が子どもの学びに及ぼす影響, 教育実践学研究, 14(1), pp.11-21.
- (28) 鈴木直樹, 鈴木理, 土田了輔, 廣瀬勝弘, 松本大輔 (2010) だれもがプレイの楽しさを味わうことができるボール運動・球技の授業づくり, 教育出版, pp.102-103.
- (29) 岩立裕子 (2017) 「深い学び」が生まれるための「交流」活動, 全国国語授業研究会 (編), 国語授業における「深い学び」を考えるー授業者からの提案ー, 東洋館出版, p.82.
- (30) 福田 (2005), 前掲書, p.21.
- (31) 福田 (2005), 前掲書, p.48.
- (32) 福田 (2005), 前掲書, p.6.

Possibility of Cross-Curricular Learning with “Body” as a Keyword

Ryosuke TSUCHIDA* · Hiraku MORITA** and Kei KAMIJIMA***

ABSTRACT

In this study, the possibility of organizing cross-curricular learning with “body” as a key word was examined from the perspective of college health and physical education.

Cross-curricular learning has developed in elementary school curriculums in Japan. Since one classroom teacher teaches several subjects to his/her class in elementary schools, it will be easy to organize cross-curricular learning by picking up common subjects from multiple subjects. However, some colleges have succeeded in organizing cross-curricular learning in the subjects related to health and physical education. It seems difficult to implement curriculum management in universities where specialized fields are subdivided. Therefore, if the reasons for the success of cross-curricular learning are unveiled, it will be beneficial to future curriculum organization.

Consequently, it became clear that many specialized fields, even in school course guidelines for junior high schools in Japan, could find themes of a lecture by setting the “body” and word associated with it, such as “health” or “sport,” as common keywords.

KEY WORDS

Cross-curricular learning, Body, Health, Sport

* Music Fine Arts and Physical Education, ** Chiba Institute of Technology *** Niigata Institute of Technology